

まえがき

## 問題としての「欲望」

原 和之

二〇一〇年春に始動したUTC P 中期プログラム「精神分析と欲望のエステイクス」は、初年度にあたる二〇一〇年度、七名の研究者を内外から招いて講演会・共同セミナー等を開催したほか、プログラムメンバーによるレクチャー、第三回国際精神分析・哲学学会における研究発表などの活動を行った。本書はその一端を伝えるべく、うち二名の海外研究者による計四回の講演にあたって準備されたテクストの日本語訳とプログラムに参加した若手研究者がさまざまな機会におこなった口頭発表を日本語論文にまとめたものを集めて構成されている。プログラム最初の刊行物ということで、これらの活動が展開されたプログラムの出発点となった構想について、はじめに簡単に説明したい。

\*

元来ヒステリーへの治療的アプローチとして登場した精神分析を、人文学の文脈であらためて問題にする意義を説明するにあたっては、さまざまな論点があげられる。創始者であるフロイト自身が、文学をはじめ

とする芸術作品や歴史、民俗学などを参照することで自らの思考を深めていったこと。精神分析家の養成には、人文学的な素養が不可欠であると考えていたこと。さらに二〇世紀の人文学の展開の中で、精神分析がさまざまな領域で参照され、大きな影響を与えてきたこと。さらにこれらの点から確認される精神分析と人文学の密接な相互関係の背後には、そもそも精神分析を登場せしめ、人文知の表舞台へと呼び出すことになった、西欧における大規模な知の地殻変動があると考えることができる。この点を問い続けたミシェル・フーコーは、講義『主体の解釈学』のなかで、真理をめぐる二つの立場の相克としてこれを提示した。西欧哲学史のなかでは、認識による真理という考え方が優勢を占めているかに見えるが、実際には、主体自身の変容とおして真理に到達するという考え方が同等の重要性をもつて存在していたとフーコーは指摘する。彼によれば、「自己」認識 *connaissance de soi* と「自己」への配慮 *souci de soi* というこれら二つの契機のうち、おおむねデカルトを境にして前者の立場が優勢となり、主体の変容はなくとも認識によって真理に到達できるという考え方が支配的となったが、一九世紀にはそれと逆方向のシフトが生じ、主体の変容をふたたび前面化する潮流が登場してきた。こうしたなかで精神分析は、ヒステリーの治癒経験を手がかりに、まさに（無意識の欲望の）認識こそが（症状の解消という）主体の出来事を生ぜしめるのだと主張したという点で、特異な位置を占めているということができよう。

どのようにしてひとは「知る」ことよって「変わる」のか。精神分析がその理論的な作業のなかで行おうとしてきたことは、この認識と出来事の特異な絡み合いに光をあてることであつたといつてよい。ただ、こうしたフーコー的な構想の中での精神分析の位置が見通せるようになるためには、精神分析の内部で生じた一定の理論的精緻化とそれにとまなうブレイクスルー——一九世紀数学の解析分野で生じた変化に続く、もう一つの「分析革命」——が不可欠であつた。そしてこれを可能にしたのがラカンであり、彼の思考が内包する「欲望をめぐる誇張的懐疑」とでもいうべき契機である。

そもそも精神分析の根幹をなす「無意識の欲望」の主張は、その是非をめぐって様々な立場を生み出してきた。この点は、「解釈」というかたちでこの主張にはじめて接したフロイトの患者たちも例外ではない。例えば一方の極に、フロイトの解釈がすんなりと受け入れられる「[Exoriat] ex nostris ossibus ulior」の言い間違（『日常生活の精神病理学』）のような事例があるとすれば、他方の極には解釈に対する患者の拒否がやがて分析関係の中断を引き起こすにいたる『症例ドーラ』のような事例が見出される。そしてこの後者のような事例が、やがて患者が示す「抵抗」としてフロイトの技法論のなかで前景化されるようになることを考えると、無意識の欲望が与えられているということがどのように基礎づけられるかという問題は——フロイト自身は決してこれを認識論的な問題として定式化することがなかったとしても——彼の精神分析の問いの核に位置していたと言えるだろう。

さてこれに続いてラカンが踏み出した一歩とは、この無意識の欲望の所与性を持つ問題をはらんだ性格を、欲望の所与性一般に拡張したという点にある。すでに他のところでも論じた点だが、ラカンは一九三二年の医学博士論文で精神医学の認識論的基礎づけという課題に取り組むうちに、そもそも他者の欲望はけつして「事実」の水準に属するものではなく、知を成立させるために必要な「要請」<sup>ポステラ</sup>の水準に属するものであると考えるようになる。確かに私は、他者が自分と同じように欲望する存在だということを自明なことで考えている。あるいはことさらにそう考えることがなくとも、それを当たり前として振舞っている。しかし正常とされる人でも他者の欲望の事実について誤ることがありうるし（フロイトが「不気味なもの」の手がかりとして挙げていた、人間と間違えられる人形オルンピアの例を考えればよいだろう）、また実際にありもしない他者の欲望があると思ひ込む症状（パラノイア）が存在する以上、その自明性をそのまま受け取るわけにはゆかない。それでは他者の欲望について、それがその対象という点だけでなく、その存在という点でも不確かなものであると考えるとすればどうなるか。この誇張的懐疑の立場から帰結するのは、そもそも他者に

ついで、とりわけその心について何かを知りうるという可能性が決定的に喪われるということに他ならない。そしてここから次の結論が導き出される。すなわち我々は、事実として存在する欲望を知覚のような仕方では受け取るのではない。そうではなく、我々は、他者について何かを知りたいという、知の欲望に従う限りで、他者が欲望するということを欲望しているのであり、他者の欲望とはそもそも、この「主体における他者の欲望の欲望」に呼応して現れるものなのだ。そして、理解不能な他者たるパラノイア患者を、にもかかわらず理解しようとして自罰の欲望を想定する精神医学者と、自分の人生の惨めな失敗を説明し受け入れ可能にしてくれるような他者の好意や悪意を確かな事実であるかのようにして思い込んでしまうパラノイア患者は、それぞれの仕方でおびかされた知を欲望の想定によつて回避しようとしている点で、この同じ機制に従っているのだ。こうして他者の欲望についての誇張的懐疑の瞬間を経て、他者の欲望が、その対象という点だけでなく、その存在という点ですでに「問題」としてある、とする視座が確保される。そしてそこから出発して、のちにラカンは分析関係の主体とエディプスの主体がいずれもこの問題としての「欲望」を軸として構造化されているとする観点から、精神分析の形式化を推し進めてゆくことになるだろう。

欲望は徹頭徹尾「問題」としてある。ラカンの言う「ファルス」は、この問題としての「欲望」に与えられた理論的分節化に他ならない。（そしてファルスを「問題的なもの *le problématique*」として位置づけたドゥルーズは、こうしたラカンの構想をこの上なく正確に捉えていたと言うことができる。）「問題」である、とはこの場合、どこかに独立して欲望が存在して、それが不十分にしか表現されず理解されていないということではない。ラカンが「欲望とその解釈 *Le désir et son interprétation*」というセミナーのタイトルを、「欲望はその解釈 *Le désir est son interprétation*」と読み替えることで示そうとしたのは、彼の初期の構想から直接に帰結する、そうした欲望の抜き難い問題性なのである。

さて、この読み替えはさらに、精神分析を素朴な記号論を超えて展開するということを求めるものでもあ

る。それは、意味するモノ、何かを「言わんとする *vouloir dire*」モノ——この表現には「望むこと *vouloir*」がはつきりと刻印されていることを確認しておこう——としての「言語」を、そうであるとは認められていなかったモノに解釈を介して拡張することではない。というのも実際には記号なるものは存在せず、ただ記号化があるだけだからだ。そしてその記号化の中には、どんなにわずかであれ、つねに主体性の契機が内包されている。すなわち他者の欲望があつてほしいと望む、主体の欲望の契機が内包されているのだ。その意味で、「他者の欲望はどのようにして与えられるのか」という問いは、その所与性の重要な構成要素のうちに、主体の欲望が抜き難く入り込んでいることを認めることになるだろう。ラカンが自らの他者の欲望をめぐる議論を、「超越論的感性論 *esthétique transcendantale*」ならぬ「超越論的倫理 *éthique transcendantale*」（セミネール『不安』）と呼んだ一つの理由はそこにある。

言い換えれば、ラカンの構想を特徴づけているのは、欲望の所与性をめぐるラディカルな主観主義である。そしてこの主観主義のもとで、言語と対象は、それ自体として意味するモノとそれによって意味されることしかししないモノという実体的な区別であることをやめ、記号化ないし解釈の営みの二つの様態として現れてくる。すなわち他者の欲望を支えているはずの主体の欲望が見落とされ、あたかも他者の欲望が自立しているかのようにして現れてくる記号化＝解釈と、他者の欲望が主体のうちに根をもつことが決して忘れられることがないような記号化＝解釈の違いとして現れてくることになるのである。

そしてこうしたフロイト＝ラカン思想がもたらした「欲望」をめぐる視座の転換と相関して、その理論的な課題も大きく変化する。問題なのはもはや、他者の欲望を正しく言い当てることや、その欲望についての知を基礎づけるということではありえない。そうではなく、そもそも正解がありえず、解釈としてしかありえない欲望について、それが問いに付され、想定され、断言され、そしてまたあらためて問いに付されるプロセスを説明すること、つまり問題としての「欲望」が成立するための諸条件と、その答えの試みにおいて

機能している一定のロジックを明らかにすることこそが求められているのだ。この解明の中では、他者の欲望はあるかないかの二分法に従うのではなく、その問いの立て方に応じて、そしてそこで主体がとりうるポジションに応じて、多様なグラデーションのもとで現れてくる。そしてこれをそのあらゆるニュアンスにおいて把握するためには、そうしたさまざまな欲望の問題が立ち現れる場である文化の広い領域を包摂する視野とともに、一般に他者との対峙という経験に固有の所与性を問う、独自の感性論エステティクスがどうしても必要になってくるのである。

\*

こうして拓かれた「精神分析と欲望のエステティクス」のパスpekテイヴのなかでは、まず「欲望」概念の批判的検討を通して、その問題としての性格を注意深く維持することが不可欠になるが、本書に収録されたウラジミール・サファトル、パトリック・グイヨマル両氏による講演は、「欲望」概念を、それがあまり込みかねない精神分析内外の特定の理論化の文脈から解放する視点と手法をそれぞれ異なったやり方で提示しており、上で述べた批判的検討の手がかりを与えてくれるものとなっている。またプログラムの若手研究者も、本書に掲載された論文が示すとおり、こうした先達の姿に導かれ、それぞれの専門分野から精神分析と人文学の新たな関係を模索しはじめている。また緒に就いたばかりのこの試みであるが、今後のさらなる展開のためにも、多くの方からご意見を賜ることができれば幸甚である。